ご挨拶

—第４巻創刊によせて—

杉本なおみ
第４回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会会長
慶應義塾大学看護医療学部

このたび、日本ヘルスコミュニケーション学会第４回学術集会の開催にあたり多大なるご支援を賜りましたみなさまに、この場をもちまして改めて厚くお礼申し上げます。

当学会は、東京大学（2009 年）、京都大学（2010 年）、九州大学（2011 年）と回を重ねるごとに、「健康・医療」と「コミュニケーション」に関わる研究者・教育者・実践家の集う場として着実な成長を遂げてまいりました。続く今回、こうして湘南の地での開催に至りましたことに格別の感慨を禁じ得ません。

湘南は歴史的に「健康・医療」と縁の深い土地です。明治期に東京医学校のドイツ人医師により海水浴場の適地として見出され、我が国初の結核療養所が建てられました。

また「異質なるものに対する寛容さ」も湘南の特徴の一つに挙げられます。中国の「湘南県」に因む名前を持ちつつ、イギリスの海浜保養地をモデルに開発されたこの地には、多くの文人・要人が居を構え、活発に議論を交わす文化が育まれました。ここ湘南藤沢キャンパスの先取の気質や自由闊達な雰囲気も、このような環境と決して無縁ではないように思います。

このような歴史的経緯を鑑み、今回は「健康と医療をめぐるコミュニケーション–実践知を學問にすゝめるために」をメインテーマに掲げました。「健康・医療」への思いの強さは同じであっても、「コミュニケーション」には実に多様なアプローチが存在します。本領域が真に学際的な「学問」としてさらなる高みを目指すには、まず私達自身の研究・教育活動を通じて、異質なものに対して敬意を払い、優れたところを率先して取り入れる姿勢を示すことが肝要と考えます。

そのような真に実りある交流を目指し、本大会では３つのセッションと２つの特別講演を設け、本領域が学際的な「学問」として前進するための要件について、参加者のみなさまと共に考えました。これがヘルスコミュニケーション学のさらなる発展に資することを祈念しつつ、その成果をこの「日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌　第４巻」として発刊いたします。